

衛生的なビルを実現

ビルを清潔に保つ
環境衛生対策 特集

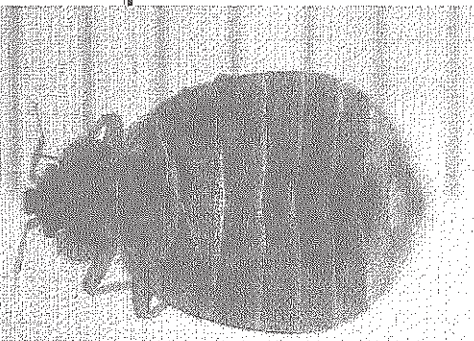
どれだけ設備が整ったビルでも、衛生的でなければネズミやゴキブリなどの有害生物が発生してその価値を大きく損なってしまう恐れがある。今回は、最近流行している有害生物とその対策について取り上げる。

が、その後衛生環境の向上

トコジラ
の写真

近年急激に増加している 繁殖力高い有害生物対処

トコジラミ発生に注意



近年、日本では繁殖力の強い有害生物の発生が続いています。量



代表取締役社長
元木 貢氏

近では、トコジメミの発生が増えており、テレビなどのメディアでも取り上げられる機会が増えました。トコジメは繁殖力・生命力ともに強い上に、被害にあったと気付くまでにタイムラグが生じるため、発生箇所を特定するまでは、被害者から損内容やレクチャーした相談ください。

こうしたトコジラミの発生拡大の理由のひとつに、海外からの渡航者増加が挙げられている。トコジラミ自体は過去にも流行したことのある昆虫だが、海外との行き来が、こうした昆虫による被害のほかに、注意したいところだ。

東京消防庁の調べによると、ネズミを原因とした火災による被害は同庁管内で年間約5000万円にのぼっているという。

ネズミが建物の中に生息するのは、建物や設備

発生原因を特定し早めの対策が急務

り、いずれもオーナー及び管理者の注意次第である程度防ぐことができる。といえる。

ネズミと一口に言ってもその種類はクマネズミ、ドブネズミ、ハツカネズミなどさまざまで、生態もそれぞれ異なるが、ビルの場合、

そして、警戒心が強く、毒餌やトラップ等にもかからにくいのが特徴で、防除は難しい。

ねずみ駆除協議会が平成15年に行った生息実態調査によると、都市部のクマネズミは増加傾向にあり、生息するビルの割合は東京でなんと94・7%にものぼるといふ結果

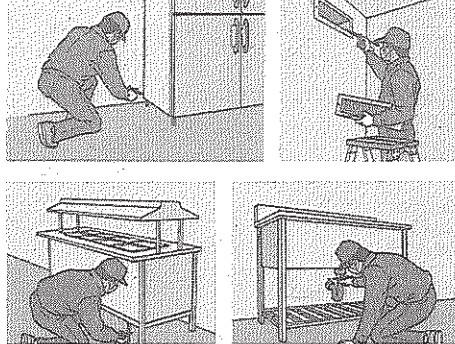
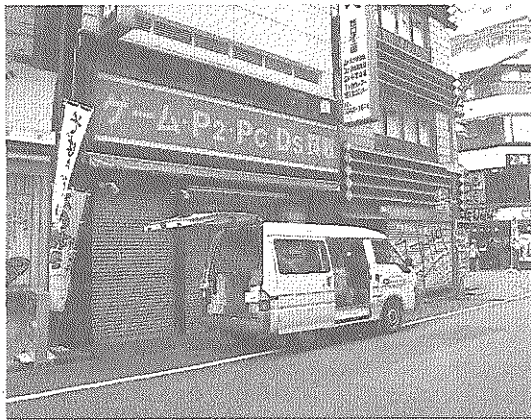
に構造上の問題が生じて、そのほとんどがクマネズミが出てくる。このクマネズミの場合、管理体制にミで、天井裏や壁のズミへの対策が緊急の課題がある場合とが、内部などに巣を構える。(11面に続く)



健康局生活衛生課
吉田 諭史氏

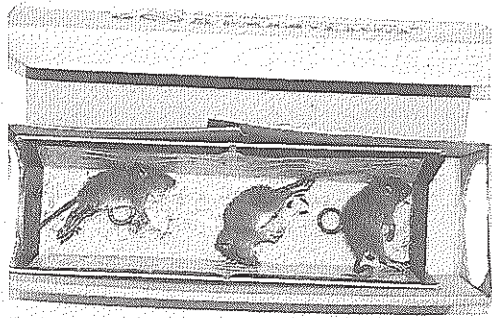
厚生労働省はビル衛生管理法（ビル管法）の管轄官庁として、法律の制定および円滑な運用に向けた取り組みを行っています。ビル管法の中では環境衛生に関する内容も定められています。このほかにも有害生物対策に

調査と適切な化学物質の使用という流れに移行しており、ビル管法の適用対象である延床面積300.0㎡以上の特定建築物を中心に、IPMを反映した対策が行われつつあります。環境衛生に関する事業者や業界団体とも連携して普及に取り組みたいと考えています。



有害生物が住み着けない環境をつくり

(10面より続く)



(10面より続く)

題であるのはいうまでもないだろう。

ネズミが侵入するのは、植え込み周辺にある出入り口のすき間や駐車場の入口、地下街等に接続しているケーブル周囲のすき間などさまざまであっていったん侵入するとダクト、電気シャフト、パイプシャフトなどをたつてビルの広範囲を移動する。

それでは、どうやってネズミを防除すれば良いのだろうか。

ネズミの防除には、餌となる食物を断つ、通路を遮断する、そして巢を作らせないの3点が基本となる。

具やコードの被害は、ネズミが伸びる歯を研ぐ形で発生しており、食料確保の過程で発生しているわけではない。なので、きちんと上記の3点を解決すれば、ネズミの繁殖は困難となる。食品を扱うテナントがある場合には倉庫をきちんと密閉し、ごみはきちんと処分し、ごみはきちんと処分

から一掃するといつやり方が一般的に行われていたが、これは推奨できるものではない。

クマネズミ自体が殺鼠剤に強い上に、薬剤の量を増やすにしても、すでに発生している有害生物を全滅させるためには、ビル中にくまなく、致死量の薬剤を散布し続ける

対策を取るか、それよりも多ければ直接駆除を行うという形で、入居者に害を与えない水準まで数を減らすという対策を取る。ここでポイントとなるのは、根絶を目指すのではなく、あくまで利用者に悪影響が出ない数まで減らすことを目指すことで、薬剤の散布しすぎ

▲いかにネズミのいない環境をつくるか

餌からさらにはビル内の整理整頓を徹底し、ネズミの巣をを作る環境を奪つことが重要だ。

なお、通路の遮断についてはずでに多数のネズミが侵入している状態ではないかは効果薄い。先にと考え、他の対策を施し、最後に行つことが望ましい。

そして、すでにネズミが繁殖している場合の対応法だが、かつては徹底が、家的に薬剤をまいて、ビル

の大量の薬剤が人体や環境への悪影響としてはね返ってくるためだ。

この問題を解決する手法として、有害生物対策の業界団体である日本ペストコントロール協会が提唱しているのが総合的有害生物管理（以下IPM）という防除スタイルである。

IPMの特徴は、その個体が出現したり、強い抵抗力を持ち、毒性の

大量の薬剤散布は、人間への健康被害が懸念さ

る。大きな問題として、駆除薬剤などに耐性を持った個体が出現する。ネズミを例に挙げると、薬剤の入った餌とそうでない餌とを見分け、強い個体が出現したり、強い抵抗力を持ち、毒性の

餌からさらにはビル内の整理整頓を徹底し、ネズミの巣をを作る環境を奪つことが重要だ。

大量の薬剤散布は、人間への健康被害が懸念さ

る。大きな問題として、駆除薬剤などに耐性を持った個体が出現する。ネズミを例に挙げると、薬剤の入った餌とそうでない餌とを見分け、強い個体が出現したり、強い抵抗力を持ち、毒性の

生状況に合わせ、管理することにある。具体的に言えば、発生状況を調査・観測して把握し、対処が必要ならベルにあるか否かを確認。一定レベル以上の発生が確認されたなら、それ以上の繁殖を抑える

弱い薬剤なら、摂取しても死なずにそのまま生き残ってしまうというケースもみられるという。

自ら対策を行ったものの、思うような効果を得られないといった場合には、信頼できる専門家を、発見して駆除を依頼する方が最終的なコストを抑えることにつながるのではないだろうか。

日本ハストコントロール協会

た。こうした中、普及拡大のため、世界各国の業界団体と交流を行い、情報の交換を行って対策技術を修習すること

業界団体である当協会では、IPM宣言を行い、環境に配慮した防除の必要性と、事前の綿密な調査による効果的な防除の実施を訴えるとともに、業界全体でこうした防除スタイルの徹底を宣言しています。この宣言をきったけに、対処療法的だった従来の防除から、必要な薬品を必要だけ使い、それでいて効果的に有害生物の発生を根本から抑えるという防除に転換しています。この有害生物に対する防除の方針は、世界的にはほぼ共通の認識となっています。当中で提唱されてきまし

協会としても、IPMの

害虫駆除の現場では、手取り早く害虫を排除できる殺虫剤が対策手段として広く使われてきました。しかし、殺虫剤による防除は害虫の発生を根本から絶つという観点には立っておらず、防除効率が悪いことに加え、人体や環境に対する悪影響の懸念などから、殺虫剤などの薬剤を使用しない害虫対策の必要性が世界

副会長
平尾 素一氏

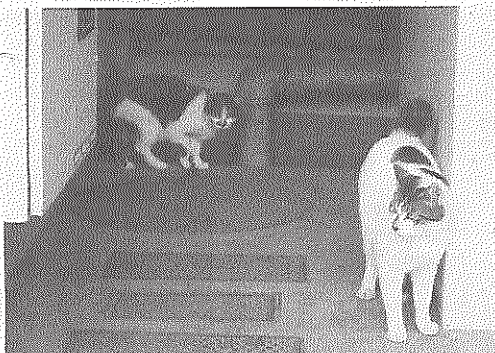
昔から、ビルにおける害虫駆除の現場では、手取り早く害虫を排除できる殺虫剤が対策手段として広く使われてきました。しかし、殺虫剤による防除は害虫の発生を根本から絶つという観点には立っておらず、防除効率が悪いことに加え、人体や環境に対する悪影響の懸念などから、殺虫剤などの薬剤を使用しない害虫対策の必要性が世界

た。こうした中、普及拡大のため、世界各国の業界団体と交流を行い、情報の交換を行って対策技術を修習すること

業界団体である当協会では、IPM宣言を行い、環境に配慮した防除の必要性と、事前の綿密な調査による効果的な防除の実施を訴えるとともに、業界全体でこうした防除スタイルの徹底を宣言しています。この宣言をきったけに、対処療法的だった従来の防除から、必要な薬品を必要だけ使い、それでいて効果的に有害生物の発生を根本から抑えるという防除に転換しています。この有害生物に対する防除の方針は、世界的にはほぼ共通の認識となっています。当中で提唱されてきまし

協会としても、IPMの

ビルに効果的な有害生物対策を推進



▲猫の手も借りたいネズミ対策